



新日本フィルハーモニー交響楽団
2022/2023シーズン

2022
11
November

NODOKA OKISAWA



MAXIM EMELYANYCHEV



11

2022/2023 Season
November

新日本フィルハーモニー交響楽団 11月演奏会

Contents

トリフォニーホール・シリーズ/サントリーホール・シリーズ #645	相場ひろ	1
すみだクラシックへの扉 #11	小室敬幸	7
マーラー: 亡き子をしのぶ歌 歌詞対訳		13
楽員ストーリーズ ⑩ 神農広樹 (オーボエ)		17
NJP from Inside		18
NJP50周年誌... こぼれ話 齋藤 克		21
NJP 1月公演 片桐卓也の《鑑賞のツボ》		22
井上道義 ミュージカル・オペラ 制作発表会レポート		23
2022/2023シーズン 定期演奏会プログラム		25
室内楽シリーズ		29
「パトロネージュ・システム」のご案内		32

■特別支援企業

オリックス

in 鹿島

CCC

大和証券

東京東信用金庫

NOMURA

フジサンケイグループ

三井住友銀行

■特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

特別支援企業/団体は、新日本フィルの運営を支援しています。

〈ご来場のお客様へ〉

下記ご協力下さいますようお願いいたします。



Triphony Hall Series
Suntory Hall Series
2022-2023 Season
#645

11.3 [木・祝] トリフォニーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
トリフォニーホール・シリーズ 第645回定期演奏会
2022年11月3日(木・祝) 14時00分
すみだトリフォニーホール

11.4 [金] サントリーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
サントリーホール・シリーズ 第645回定期演奏会
2022年11月4日(金) 19時00分
サントリーホール

●ハイドン (1732-1809)

交響曲第95番 八短調 Hob.I:95

約20分

Joseph Haydn: Symphony No. 95 in C minor, Hob.I:95

- I. Allegro moderato
- II. Andante cantabile
- III. Menuet
- IV. Finale: Vivace

●プロコフィエフ (1891-1953)

ピアノ協奏曲第2番 ト短調 op.16 *

約35分

Sergei Prokofiev: Piano Concerto No. 2 in G minor, op. 16 *

- I. Andantino
- II. Scherzo: Vivace
- III. Intermezzo: Allegro moderato
- IV. Finale: Allegro tempestoso

—— 休憩20分 ——

●ラフマニノフ (1873-1943)

交響的舞曲 op.45

約40分

Sergei Rachmaninoff: Symphonic Dances, op. 45

- I. Non allegro
- II. Andante con moto: Tempo di valse
- III. Lento assai - Allegro vivace

[指揮] マクシム・エメリヤニチェフ

Maxim Emelyanychev, Conductor

[ピアノ] アレクサンドル・メルニコフ *

Alexander Melnikov, Piano *

[コンサートマスター] 西江辰郎

Tatsuo Nishie, Concertmaster

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞

Mai Tategami, Assistant Concertmaster

■主催: 公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催: すみだトリフォニーホール [11/3公演]

■助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人 日本芸術文化振興会
公益財団法人 ローム ミュージック ファンデーション

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。



Rohm Music
Foundation
ロームミュージックファンデーション

Profile



マクシム・エメリヤニチェフ [指揮]

Maxim Emelyanychev, Conductor

1988年、ロシア生まれのマクシム・エメリヤニチェフは若い世代の最も才能のある指揮者として認められている。

ニジニ・ノヴゴロド音楽院で指揮を学んだ後、モスクワ音楽院でロジェストヴェンスキーに師事。12歳で指揮者としてデビュー。以来、モダン・オーケストラ、古楽オーケストラの両方を指揮している。現在、スコットランド室内管弦楽団と古楽アンサンブル、イル・ポモ・ドーロの首席指揮者を務めている。

これまでにロンドン・フィル、コンセルトヘボウ管、パリ管、トゥールーズ・キャピタル管、リヨン国立管、ミラノ・ヴェルディ管、ロイヤル・リヴァプール・フィル、サンクトペテルブルク・フィル、東京交響楽団などへ客演。19年8月にはエイジ・オブ・エンラインメント・オーケストラを指揮してヘンデル『リナルド』でグランドボーン音楽祭にデビューを飾った。

22/23シーズンはベルリン・フィル、ミュンヘン・フィル、チェコ・フィル等にデビューする。

ジョイス・デイドナートとの録音、ヘンデル『アグリッピーナ』はグラモフォン賞オペラ部門を受賞した。



© Julien Mignot

アレクサンドル・メルニコフ [ピアノ]

Alexander Melnikov, Piano

1973年モスクワ生まれ。6歳でモスクワの中央音楽学校に入学し、モスクワ音楽院ではレフ・ナウモフ教授に学ぶ。卒業後、ミュンヘンでエリソ・ヴィルサラゼに師事。アンドレアス・シュタイアーやカール=ウルリッヒ・シュナーベルらから手ほどきを受けたほか、スヴァトスラフ・リヒテルとも親密な関係を築いた。

シューマン国際コンクール、エリザベート王妃国際音楽コンクールなど主要な国際ピアノコンクールで入賞、以来国際的に活躍。コンセルトヘボウ管、ゲヴァントハウス管、ロッテルダム・フィル、ロシア・ナショナル管、サンクトペテルブルグ・フィル、BBCフィル、フィラデルフィア管などと共演。室内楽ではイザベル・ファウストとデュオを組んでいる。また、アンドレアス・シュタイアーとピアノ・デュオ活動も行っている。

ハルモニア・ムンディよりブラームス、ラフマニノフやスクリャーピンのソロのほか、イザベル・ファウスト、ジャン=ギャン・ケラスなどとの共演による室内楽曲をリリース。エコー・クラシック賞、グラモフォン・アワード、“Choc de classica”賞などを受賞している。

Program Notes ●相場ひろ

創作は、常に作り手の創意と受け手の許容度・理解度とのせめぎ合いである。作り手が尖鋭に傾きすぎ、受け手の理解を超えれば、その作品がどれほど予言的であったとしても批判を浴びる。作り手は受け手のキャパシティを押し量りつつ創作を進めることで、自らの芸術的意図と作品の興行的成功とを共に実現することを期待する。

ヨーゼフ・ハイドンは、長くエステルハーザ家に仕え、音楽通であった同家の当主ニコラウスのために、ときに実験的とも言える多彩で大胆な楽曲を作った。しかしニコラウス没後、広く一般聴衆に向けて作品を発表するにあたっては、平明でスケール大きい作品を目指し、その目論見通りに聴衆を虜にすることができた。

若い頃のセルゲイ・プロコフィエフはモダニズム指向とアイロニーや諧謔に満ちた性格のために、作品を発表するごとに賛否を巻き起こした。ピアノ協奏曲第2番は、あまりに斬新な音響のために初演時には激しい拒絶反応をみせる聴衆もいたという。現在知られている改訂版はモダニズムの点で大きく後退し、より聴き易く改作されていると言うが、それでもここに繰り広げられる音楽の異様な緊張、挑戦的で巨大なカデンツァは、なお聴き手を刺激して止まない。

セルゲイ・ラフマニノフは、聴衆の反応に一喜一憂し、激しい批判を浴びた時には自信を喪失し、創作意欲を失ってしまうことすらあった。彼の作品でもっとも大きな大きな失敗をみたのは1897年に初演された交響曲第1番 二短調 op.13で、これは彼の作風が前衛に過ぎたと言うよりは、管弦楽の大作に不慣れであったために、構想・書法の両面で未熟さを露呈したためであろう。しかしラフマニノフはこの若書きを破棄することができず、後年改訂を夢見たもののロシアからの亡命時に楽譜を持ち出すことができなかったために、その機会を失ってしまった。晩年、彼は最後の大作となった「交響的舞曲」にその一部を引用して、後世に存在を知らしめた。

■ ハイドン：交響曲第95番 八短調 Hob.I:95

1790年、ヨーゼフ・ハイドン(1732~1809)は長年宮廷楽長を務めていたエステルハーザ家を離れることを決意した。折からロンドンで演奏会を主催していたヨハン・ペーター・ザロモンが彼のもとを訪れて英国へと招き、ハイドンは1791年から95年までの間に2度英国に長期滞在し、12曲の新作交響曲をロンドンで発表することになる。これがいわゆる「ロンドン

新天地での
新作シンフォニー ▶

交響曲]または「ザロモン交響曲」と呼ばれる作品群である。

短調を限定的に使用 ▶

交響曲第95番は1791年に書かれ、おそらくは同年4月に開かれた演奏会で初演された。12曲のザロモン交響曲中、短調をとる唯一の曲であり、かつ第1楽章に長大な序奏を伴わない曲も他にない。ただし短調の支配は限定的で、第1楽章も結尾は長調で終わるのに加えて、第2、4楽章は長調をとる。

構成(4楽章)と特徴 ▶

第1楽章 アレグロ・モデラート。ソナタ形式であり、冒頭にあらわれる第1主題の最初の5音の動きは、楽章全体で繰り返し演奏されて強い印象を与える。

第2楽章 アンダンテ・カンタービレ。主題と3つの変奏、および短いコーダからなる。第1変奏でチェロの独奏が活躍するのが耳を惹く。

第3楽章 メヌエット。短調の力強い主部に対して、トリオはチェロ独奏が前面に打ち出されて、優美な旋律を奏でる。

第4楽章 フィナーレ：ヴィヴァーチェ。自由なソナタ形式であり、フーガを採り入れた書法は、モーツァルトの交響曲第41番ハ長調「ジュピター」を思わせる。同曲は当時聴衆の間にはほとんど知られていなかったが、ハイドンが楽譜を目にし、その手法を採り入れていた可能性はある。

[楽器編成]フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部。

■ プロコフィエフ：ピアノ協奏曲第2番ト短調 op.16

セルゲイ・プロコフィエフ(1891~1953)のピアノ協奏曲第2番は1913年に作曲・初演されたが、そのあまりに斬新な音楽は賛否共に激しい反応を引き起こした。この時の総譜はロシア革命の混乱の中で一度焼失したが、後に彼は草稿を基に曲を復元し、かつ大幅な改作を施して、1924年にパリで再演した。

物議を醸した ▶
初演・改訂を経て

構成(4楽章)と特徴 ▶

第1楽章 アンダンティーノ。仄暗い第1主題と、リズムカルで諧謔味を感じさせる第2主題の対比が鮮やかである。やがてピアノ独奏は楽章の半分近くを占める長大なカデンツァを奏し、このカデンツァが頂点に達すると、管弦楽が回帰して独奏と共に強靱なトゥッツィを築き上げる。

第2楽章 スケルツォ：ヴィヴァーチェ 4分の2拍子で開始される第2楽章は、スケルツォというよりもトッカータ風の曲想をもち、ピアノ独奏が一気に楽章を駆け抜けていく。

第3楽章 間奏曲：アレグロ・モデラート 重々しい足どりとシニカルな

哄笑に彩られた、行進曲風の楽章である。抒情的なエピソードも時折顔をのぞかせるものの、すべては行進曲に呑み込まれてしまう。

第4楽章 終曲：アレグロ・テンペストーソ 管弦楽の鮮やかな色彩を従えて辛辣に開始されるものの、仄暗くも抒情的な主題に基づく中間部によって、先行する3楽章と大きく雰囲気を変える点がユニークである。ピアノ独奏が長いカデンツァを奏した後、熱狂のうちに全曲の幕を閉じる。

[楽器編成]ピアノ独奏、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、タンバリン、弦楽5部。

■ ラフマニノフ：交響的舞曲 op. 45

セルゲイ・ラフマニノフ(1873~1943)にとって最後の大作となった「交響的舞曲」は、1940年10月に完成された。

舞台化も視野に入れつつ ▶

1939年に旧作の「パガニーニの主題による狂詩曲」がミハイル・フォーキンの振り付けでバレエ化されて成功を取めたことで、ラフマニノフはオリジナルのバレエ音楽を作曲しようと思立ち、「交響的舞曲」を構想した。しかし舞台化はフォーキンの死によって実現することがなかった。

聖歌、自作の引用も ▶

曲中、第1楽章では交響曲第1番が回想され、第3楽章には彼がたびたび自作に引用したグレゴリオ聖歌「怒りの日」に加えて、無伴奏合唱曲「晩禱」など、自身の作品からの引用が顔を出す。また、オーケストラには珍しくアルト・サクソフォンが加えられ、印象的な独奏を披露している。

構成(3楽章)と特徴 ▶

第1楽章 ノン・アレグロ。三部形式で書かれているが、ソナタ形式をとるとも解される。冒頭で提示される3つの音からなる動機は、リムスキー=コルサコフの歌劇「金鶏」からの引用とされる。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート。憂愁をたたえたワルツが繰り返し広げられる。和声や色彩の扱いにはドビュッシーやラヴェルらフランス近代音楽の影響も見てとれる。

第3楽章 レント・アッサイ~アレグロ・ヴィヴァーチェ。不穏な空気を漂わせる短い序奏の後、慌ただしい動きに乗ってスケルツォ風に主部が始まる。この楽章も三部形式ないしソナタ形式で書かれており、コーダは「晩禱」の引用と共に熱狂的に全曲の幕を引く。

[楽器編成]フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、アルトサクソフォン、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、吊しシンバル、トライアングル、タンバリン、タムタム、グロッケンシュピール、シロフォン、チャイム、ハープ、ピアノ、弦楽5部。



「あした」は、ナニイロ？

鹿島のしごと。

それは「あした」をつくること。

人と自然と向き合って、

よりよい毎日をつないでいくこと。

暮らしを描く、ものづくり。

無限の創造力で、彩り豊かな未来へ。

100年をつくる会社
OLYMPUS
鹿島

SUMIDA
TOBIRA of classic
2022-2023 Season
#11

11.18 [金] 19 [土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 すみだクラシックへの扉 第11回

2022年11月18日(金)14時00分 すみだトリフォニーホール

11月19日(土)14時00分 すみだトリフォニーホール

●モーツァルト (1756-91)

フリーメイソンのための葬送音楽 K. 477 (479a)

約5分

Wolfgang Amadeus Mozart: Maurerische Trauermusik, K. 477 (479a)

●マーラー (1860-1911)

亡き子をしのぶ歌 *

約25分

Gustav Mahler: Kindertotenlieder *

1. いま、太陽は明るく昇らんとする Nun will die Sonn' so hell aufgeh'n
2. いまならわかる、なぜあれほど暗い炎を Nun seh' ich wohl, warum so dunkle Flammen
3. おまえの母さんが Wenn dein Mütterlein
4. よく思う、あの子たちは出かけているだけ Oft denk' ich, sie sind nur ausgegangen
5. こんな天気、こんな風のなか In diesem Wetter, in diesem Braus

—— 休憩20分 ——

●ブラームス (1833-97)

交響曲第4番 ホ短調 op. 98

約40分

Johannes Brahms: Symphony No. 4 in E minor, op. 98

- I. Allegro non troppo
- II. Andante moderato
- III. Allegro giocoso
- IV. Allegro energico e passionato

[指揮] 沖澤のどか

Nodoka Okisawa, Conductor

[バリトン] 大西宇宙 *

Takaoki Onishi, Baritone *

[コンサートマスター] 西江辰郎

Tatsuo Nishie, Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール

■特別協賛：オリックス、オリックス宮内財団

■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人 日本芸術文化振興会

アラム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。



オリックス株式会社
公益財団法人 オリックス宮内財団



Profile



©Felix Broede

沖澤のどか [指揮] Nodoka Okisawa, Conductor

東京藝術大学音楽学部指揮科首席卒業、同大学院修士課程修了。ハンス・アイスラー音楽大学ベルリン修士課程修了。ブザンソン国際指揮者コンクール優勝。同時に聴衆賞、オーケストラ賞を受賞。第18回東京国際音楽コンクール(指揮)にて第1位及び特別賞、齋藤秀雄賞を受賞。渡邊暁雄音楽基金音楽賞受賞。2011年~12年、オーケストラ・アンサンブル金沢指揮研究員。

これまでに指揮を田中良和、松尾葉子、高関健、尾高忠明、クリスティアン・エーヴァルト、ハンス・ディーター・パウム各氏に師事。ミュンヘン響、コンツェルトハウス・ベルリン管、N響、都響、ブランデンブルク響、ライブツィヒ響ほか多くのオーケストラを指揮。2022年セイジ・オザワ 松本フェスティバルに『フィガロの結婚』でデビュー。オペラの分野にも活動を広げている。2020年8月より2年間、ベルリン・フィルにてキリル・ペトレンコ氏のアシスタントを務めた。22年9月、ミュンヘン響のアーティスト・イン・レジデンスに就任。23年4月より京都市交響楽団常任指揮者に就任。



©Dario Acosta

大西宇宙 [バリトン] Takaoki Onishi, Baritone

武蔵野音楽大学及び大学院、ジュリアード音楽院卒業。シカゴ・リリック歌劇場にて研鑽。同歌劇場の世界初演オペラ『Bel Canto』にてアメリカ・デビュー。2019年、セイジ・オザワ 松本フェスティバルにてファビオ・ルイーダ指揮『エフゲニー・オネーギン』のタイトルロールで日本オペラ・デビュー後、国内外で『フィデリオ』『カルメン』『リナルド』『道化師』『電話』『ローエングリン』『椿姫』『愛の妙薬』『トゥーランドット』等に出演。今後はパッサ・コレギウム・ジャパン「メサイア」他、オペラでは新日本フィルハーモニー交響楽団定期にて井上道義作曲『A Way from Surrender~降福からの道~』(世界初演)、びわ湖ホール『マイスタージンガー』に出演予定。

CDはシューマン『詩人の恋』(ピアノ：小林道夫)をBRAVO RECORDSよりリリース。

五島記念文化賞オペラ新人賞、日本製鉄音楽賞フレッシュアーティスト賞。

公式ホームページ <https://www.takaokionishi.com/>

Program Notes ●小室敬幸

亡くなる直前の父親に宛てた手紙で「死は(厳密に言えば)ぼくらの人生の真の最終目標ですから、ぼくはこの数年来、この人間の真の最上の友とすっかり慣れ親しんでしまいました! その結果、死の姿はいつのまにかぼくには少しも恐ろしくなくなったばかりか、大いに心を安め、慰めてくれるものとなりました。そして、死こそぼくらの真の幸福の鍵だと知る機会を与えてくれたことを(ぼくの言う意味はお分かりですね)神に感謝しています(西川尚生 訳)」と綴ったのは、当時31歳のヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~91)だ。

誤解なきように補足しておけば、「恐ろしくなくなった」のは自らの死であって、父を含む親しい人々の他界には深い悲しみを寄せている。そう考えてみれば、モーツァルトの「レクイエム」の陰鬱さは死への恐れというよりも、喪失の嘆きであると捉えるべきなのかもしれない。他の作曲家の死生観もまた、作品に反映されるのではないかと? 例えばグスタフ・マーラー(1860~1911)は聖職者を含む人間への不信はあるようだが、神の存在は信じているからこそ死を受け入れて天上へと向かう物語を、交響曲第2~4番で描いている。ヨハネス・ブラームス(1833~97)の宗教観を研究した西原稔は「ドイツ・レクイエム」から最晩年の「4つの厳粛な歌」まで一貫して、死後における魂の救済と平安が課題になっていたのではないかと結論づけている。

■ モーツァルト：フリーメイソンのための葬送音楽 K. 477 (479a)

フリーメイソンとは ▶ モーツァルトにまつわるキーワードのなかで、これほど誤解されているものはないだろう。メイソン(mason)は「石職人」という意味なので、フリーメイソンを直訳すれば「自由な石職人」——つまり、元来は中世の建築家の集団を指していた言葉だったとされる。我々がイメージするような友愛団体かつ秘密結社となったのは18世紀初頭のロンドンだ(ちなみに、正確に言えば所属する団員をフリーメイソン、団体名はフリーメイソリーと呼ぶ)。謎が多いからこそ度々オカルトや陰謀論のネタにされてきたが、実際のところは自由が何より大事であるがゆえに特定の思想や教条に縛られず、多様な価値観を許容する団体だったようである。

作曲の経緯 ▶ モーツァルトがこの団体に入った翌年、1785年11月に団員のなかでも重要人物だったという2人の貴族が相次いで亡くなる。モーツァルト自身の記録

によれば、フリーメイソンリーのロッジ(支部)で行われた彼らのための追悼式で演奏されたのがこの曲である。三部形式で、ハ短調の主部の間に挟まれた変ホ長調の中間部では、グレゴリオ聖歌(エレミアの哀歌)が引用される。

[楽器編成] オーボエ2、クラリネット、バセットホルン3、コントラファゴット、ホルン2、弦楽。

■ マーラー：亡き子をしのぶ歌

※歌詞対訳は13～15頁をご覧ください

元となったテキスト ▶

1833年の冬、詩人フリードリヒ・リュッケルト(1788～1866)の6人の子どもたちが猩紅熱にかかり、僅か17日の間に3歳の娘ルーゼと5歳の息子エルンストが亡くなってしまふ。打ちひしがれたリュッケルトは「亡き子をしのぶ歌」と呼ばれることになる400以上もの詩を生み出した。

マーラーとリュッケルト ▶

現在では残念ながらゲーテやシラーほどには詩人として評価されていないリュッケルトではあるが、19世紀にはポピュラーでロベルト・シューマン(1810～56)らが音楽を付けている(最も有名なのは彼の「献呈」だろうか)。ゆえにマーラーが取り上げたのも自然な流れだが、特筆すべきはリュッケルトがアラビア語、ペルシャ語、トルコ語を学んだ学者であったため、彼の詩にも東洋の思想が流れ込んでいることだ。この興味の延長線上に(ドイツの詩人バートゲが自由に翻訳した李白の詩に基づく)「大地の歌」が生まれることとなる。

作曲の経緯 ▶

この歌曲集は、第1・3・4曲は1901年、第2・5曲は1904年と2回に分けて作曲された。この間、1902年3月にマーラーは19歳年下のアルマ・シンドラー(1879～1964)と結婚。同年11月には長女が、1904年6月には次女が誕生している。子宝に恵まれたタイミングでなぜ改めてリュッケルトの詩に向き合ったのかは謎だが、歌曲集完成から3年後の1907年7月に長女が4歳で猩紅熱とジフテリアの合併症により急逝。妻アルマは後年、夫の理解に苦しむ行動が不幸を呼び込んだのだと振り返っている。

シンフォニーとの関係 ▶

各曲は、マーラーの交響曲の何かしらかと繋がる雰囲気を持っているのが興味深い。例えば第1曲は同時期の交響曲第5番 第1楽章「葬送行進曲」と、第2曲は交響曲第5番 第4楽章「アダージェット」と、第3曲は交響曲第2番「復活」の第1楽章と、第4曲は交響曲第6番の緩徐楽章と、第5曲は交響曲第6番の第1楽章と……といったように。

[編成] 独唱、フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、ティンパニ、タムタム、グロックンシュピール、ハープ、チェレスタ、弦楽5部。

■ ブラームス：交響曲第4番 ホ短調 op.98

作曲者が最後に聴いた自作 ▶

1897年4月3日に63歳で亡くなったブラームスが、自らの作品を聴く最後の機会となったのが同年3月7日、ウィーン・フィルが演奏するこの交響曲だった。弟子の証言によればこの日、顔色は土気色で、死が近いことは明らかだったという。遡ること8年前の1889年、56歳の時点で既に「自分は10年以内に死ぬだろう」と知人に述べていることから、早くから自らの最期を意識していたことは間違いなく、1884～85年に作曲されたこの交響曲の随所にも老いや枯れの徴候が表れている。4楽章すべてでソナタ形式が使われているが一様ではなく、それぞれに工夫がなされているのも興味深い。

構成(4楽章)と特徴 ▶

第1楽章は枯れた味わいの第1主題から始まるが、実はオクターヴ移動を除くと、音程が3度ずつ下行・上行する規則的な音の動きで作られている。この3度下行の主題は、チェロが奏でる情熱的な第2主題の伴奏になったり楽曲の随所に現れて、無意識のうちに“墮ちる”イメージが刷り込まれていく。ソナタ形式だが展開部と再現部の始まりを曖昧にすることで、劇的なコーダを引き立てる。

第2楽章は長調なのに侘しさが際立つ緩徐楽章。ソナタ形式としては展開部が省かれている代わりに、提示部と再現部のなかで主題が存分に変奏されていく。

第3楽章はスケルツォで、この交響曲で唯一といってもいい、ポジティブなエネルギーに包まれている。ソナタ形式ではあるが、提示部の流れを維持したまま展開部が繰り広げられるので、やはりセクションの区切りは曖昧だ。

第4楽章は、J.S. バッハの教会カンタータ「主よ、われは汝を求む」BWV150の終曲「シャコンヌ：苦しみにある私の日々」に触発された変奏曲で、「ミ・ファ#・ソ・ラ・ラ#・シ・シ・ミ」という8小節の主題が36回変奏されてゆく。ソナタ形式にもなっていて、なおかつ展開部は緩徐楽章とスケルツォの性格を持っているので、4楽章制の構成をなぞっているのが興味深い。再現部の終盤には、第1楽章の3度下行主題も織り込まれていく。

[楽器編成] フルード2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、トライアングル、弦楽5部。

マーラー：亡き子をしのぶ歌

Gustav Mahler: Kindertotenlieder

対訳：堀 朋平

SHARE LOUNGE

発想が生まれ、シェアする場所

シェアラウンジは、ラウンジの居心地と本による提案、オフィスの機能性を兼ね備え、訪れた人に「新しい発想を提供する場所」です。

新たな発想は心を躍らせ、生活を明るくし、世界をほんの少し良い場所にしてくれるもの。働く人だけでなく、お子さまや学生、主婦の方など、すべての人たちが日々の暮らしの中で、発想を必要としています。

ここに集まる多様な人々が風景をつくり、そこにいるだけで刺激がもらえたり、本からインスピレーションを得ることもできる。ある時は居心地の良いカフェやバーとして、またある時は体験を促すイベントスペースとして。

新たな発想を生む、たくさんの仕掛けが詰まった空間です。

SHARE LOUNGE by Culture Convenience Club

[SHARE LOUNGE]

代官山 蔦屋書店 / 渋谷スクランブルスクエア / 下北沢 / 亀戸ほか、全国に順次拡大中。
最新の店舗一覧はアプリをご覧ください。



SHARE LOUNGE
公式アプリ

App
Store



Google
Play



1. Nun will die Sonn' so hell aufgeh'n

Nun will die Sonn' so hell aufgeh'n,
Als sei kein Unglück die Nacht gescheh'n!

Das Unglück geschah nur mir allein!
Die Sonne, sie scheint allgemein!

Du mußt nicht die Nacht in dir verschränken,
Mußt sie ins ew'ge Licht versenken!

Ein Lämplein verlösch in meinem Zelt!
Heil sei dem Freudenlicht der Welt!

1. いま、太陽は明るく昇らんとする

いま、太陽は明るく昇らんとする
夜中に不幸など なかったかのように!

不幸は この身だけに起きたのだ!
太陽、それは皆をひとしく照らす!

夜を おまえの内に折り込んでならぬ
夜を とこしえなる光の内に沈めよ!

ともじびは わが天幕の内で消え失せた!
世界の よろこびの光に救いあれ!

2. Nun seh' ich wohl,
warum so dunkle Flammen

Nun seh' ich wohl, warum so dunkle Flammen
Ihr sprühtet mir in manchem Augenblicke.
O Augen! Gleichsam, um voll in einem Blicke
Zu drängen eure ganze Macht zusammen.

Dort ahnt' ich nicht, weil Nebel mich
umschwammen,
Gewoben vom verblendenden Geschicke,
Daß sich der Strahl bereits zur Heimkehr schicke,
Dorthin, von wannen alle Strahlen stammen.

Ihr wolltet mir mit eurem Leuchten sagen:
Wir möchten nah dir bleiben gerne,
Doch ist uns das vom Schicksal abgeschlagen.

Sieh' uns nur an, denn bald sind wir dir ferne!
Was dir nur Augen sind in diesen Tagen:
In künft'gen Nächten sind es dir nur Sterne.

2. いまならわかる、
なぜあれほど暗い炎を

いまならわかる、なぜあれほど暗い炎を
おまえたちは 幾度も私にふり撒いたのか
おお眼よ! その一瞬のまなざしに
もてる力を 凝集するかのようだった

そのときは 霧にわが身を
覆われ
感わず運命に織り込まれて 気づかなかった一
もうあのとき 眼の輝きは彼方へと、
あらゆる輝きの源へと 還っていたことに

その煌きで おまえたちはこう言いたかったのだね
「あなたの近くに いたいのです
でも運命が それをはねつけた

どうか私たちを見て、じきに遠くへ旅立つ前に!
昼 あなたの眼であるもの、それはやがて
夜には星となるでしょう

3. Wenn dein Mütterlein

Wenn dein Mütterlein
Tritt zur Tür herein,
Und den Kopf ich drehe,
Ihr entgegensehe,
Fällt auf ihr Gesicht
Erst der Blick mir nicht,
Sondern auf die Stelle,
Näher nach der Schwelle,
Dort, wo würde dein
Lieb' Gesichtchen sein,
Wenn du freudenhelle
Trätest mit herein,
Wie sonst, mein Töchterlein.

Wenn dein Mütterlein
Tritt zur Tür herein,
Mit der Kerze Schimmer,
Ist es mir, als immer
Kämst du mit herein,
Huschtest hinterdrein,
Als wie sonst ins Zimmer!
O du, des Vaters Zelle,
Zu schnelle
Erlosch'ner Freudenschein!

4. Oft denk' ich, sie sind nur ausgegangen

Oft denk' ich, sie sind nur ausgegangen!
Bald werden sie wieder nach Hause gelangen!
Der Tag ist schön! O, sei nicht bang!
Sie machen nur einen weiten Gang.

Jawohl, sie sind nur ausgegangen
Und werden jetzt nach Hause gelangen!
O, sei nicht bang, der Tag is schön!
Sie machen nur den Gang zu jenen Höh'n!

3. おまえの母さんが

おまえの母さんが
ドアを開けて入ってくると
私も頭を
母さんへ向ける
でもこの視線の向く先は
母さんでなく
もっと下
敷居に近いところ
ちょうど、お前の可愛い
顔があったあたりだよ
娘よ、よろこびいっぱい
いつものように母さんと
こっちへ来てくれたらね

おまえの母さんが
ドアを開けて入ってくると
その手にほのめくキャンドルで
いつも私はこう思う—
おまえも母さんにくっついて
いつものように
ひょっと入って来た!
おお、父の細胞だったお前
こんなに早くに
消えてしまった よろこびの光よ!

4. よく思う、あの子たちは出かけているだけ

よく思う、あの子たちは出かけているだけ!
じき家に戻ってくるだろう!
昼は美しい! おお、心配ない!
ちょっと足を延ばしているのだ

そう、あの子たちは出かけているだけ
今にも家に戻ってくる!
おお、心配ない! 昼は美しい!
あの丘まで 散歩しているのだ!

Sie sind uns nur vorausgegangen
Und werden nicht wieder nach Hause verlangen!
Wir holen sie ein auf jenen Höh'n
Im Sonnenschein, der Tag is schön!

5. In diesem Wetter, in diesem Braus

In diesem Wetter, in diesem Braus,
Nie hätt' ich gesendet die Kinder hinaus,
Man hat sie hinaus getragen,
Ich durfte nichts dazu sagen!

In diesem Wetter, in diesem Saus,
Nie hätt' ich gelassen die Kinder hinaus.
Ich fürchtete sie erkranken,
Das sind nun eitle Gedanken.

In diesem Wetter, in diesem Graus,
Hätt' ich gelassen die Kinder hinaus,
Ich sorgte, sie stürben morgen,
Das ist nun nicht zu besorgen.

In diesem Wetter, in diesem Graus!
Nie hätt' ich gesendet die Kinder hinaus;
Man hat sie hinaus getragen,
Ich durfte nichts dazu sagen!

In diesem Wetter, in diesem Braus,
Sie ruh'n als wie in der Mutter Haus,
Von keinem Sturm erschrecket,
Von Gottes Hand bedeckt.

【訳者注記】

マーラーの歌詞表記には原詩からの逸脱が目立つ。この対訳ではオリジナルの詩構造を反映すべく、原則として1872年刊の遺作詩集に従う。ただし感嘆符の挿入、綴り、単語の変更と削除は、1905年刊のオーケストラ初版に従う。(それゆえ現行のドイツ語正書法には必ずしも即さない)。第5番の詩節反復も作曲家に準じる。

ほり・ともへい/1979年生まれ。住友生命いずみホール音楽アドバイザー、国立音楽大学ほか非常勤講師。東京大学大学院後期博士課程修了。博士(文学)。専門は音楽美学。近著『わが友、シューベルト』(アルテスパブリッシング、2022年冬)。

あの子たちは出かけているだけ
もう二度と 家に帰りたくはないのだから!
あの丘で 子供たちを連れ戻そう
陽光を浴びて、昼は美しい!

5. こんな天気、こんな風のなか

こんな天気、こんな風のなか
子供たちを 送り出したりしなければよかった
誰かが連れ出してしまつて
私は何も言えなかったのだ!

こんな天気、こんな騒がしいなか
子供たちを 表になど出さなければよかった
病気になるぬか心配だったが
それも今は 甲斐なき思い

こんな天気、こんな恐ろしいとき
子供たちを 表に出さなければよかった
明日にも死ぬかと おびえていたが
もうそんな心配もいらぬ

こんな天気、こんな恐ろしいとき!
子供たちを 送り出したりしなければよかった
誰かが連れ出してしまつて
私は何も言えなかった!

こんな天気、こんな風のなか
子供たちは まるで母の家にいるように
嵐におびえず 安らっている
神の御手に 護られて